

手書きで
綴ることば書道講師
手書き文字愛好家

井原奈津子

「手書き文字」を特別に意識しはじめたのは小学一年生、硬筆コンクールで賞をもらったときです。「字で褒められることがあるんだ」とびっくりし、それがきっかけで、まずは書くことが好きになりました。

三年生のころには、「丸文字」とよばれる、丸っぽく書く字が大流行し、私も大いに影響を受け、手紙や交換日記に、せっせと丸文字を書きました。

そのうちに、同じく丸文字を書く友達やアイドルの字、はたまた丸文字を書かない友達の字などが気になるようになりました。同じ丸文字でも、人に

よって印象が違う。こんなにはやっていてかわいと思う丸文字を、なぜか書かない、もしくは書けない人がいる。そんなふうの子供のころから手書き文字への愛着を深めていった結果、手書き文字を捨てることができず、我が家の押入れは四十年分の手書き文字で溢れかえっています。

幼稚園のとき、友達のゆみちゃんが覚えてたのひらがなで一生懸命書いてくれた年賀状。小中学校時代の交換日記や、授業中にこっそり回って来たメモは、その時々のはやり文字が、それぞれの友達の個性で書かれていて懐かしい。亡くなってしまった祖母からの「ばあちゃんより」と書かれたお年玉袋。

高校生くらいからは、「これは」と思った文字を、スクラップブックに収めるようになりました。美術予備校でもらった、わざと汚さを足したような、芸術的な文字で書かれた受験の手引き。音楽雑誌を作るアルバイトをしていたときに、レコード屋の店員さんからファックスされてきた真面目そうな字。雑誌に載った、ミュージシャンのかわ

いらしい字。好きな字を、いつでも見られるようにしたかったのです。ときどきブックを開いては、「この字いいわあ」と、うっとり眺めました。

二つ上の姉とは、子供のころからよく手書き文字の話をしました。丸文字をどう書くから始まり、「な」の字のかわいい書き方、また、漫画家の本田恵子さんの字はかわいいよね、とか。中学生のころには「いまどんな字書いている？」と、ときどきお互いの字を確認しました。あるとき、しばらく字を見せ合っていなかったのになぜか字が似ていて、「わかる！ いまそんな気分だよ」なんて笑ったり。

手書き文字はなぜ楽しいのか。それはズバリ、同じものではなく、全部違うものだからだと思います。人の顔のように、一つとして同じものはない。当たり前前のようにけど、不思議です。

いろんな情報が乗っかっているところもおもしろい。書く技術、スピード、使った筆記具など。さらには、それを材料に、書いた人の性格や感情などまで伝わってくる、というより、想像してしまうところ。

先日、音楽家の坂本龍一さんが亡くなりました。そのときに、同じく音楽家の小室哲哉さんが、SNSに「教授へ あなたに憧れてきました。」からはじまる、短い手書きのメッセージを發表しました。私はその文字にとても心を打たれました。

ラフな走り書き。その整えていない文字の形からは、飾らない人柄、走っている線からは、悲しみがいっぱい

とても冷静ではいられないような感情の揺れを感じました。

私は、小室哲哉さんのことは好きなミュージシャンというわけではなかったのですが、このメッセージにはとても心を動かされました。その文章の内容ももちろん感動的なのですが、私はその文字の「形」から、より細やかな衝動や悲しみを感じ取れたと思うのです。



手書きの文字は、その

線から、書いているときの速度を、無意識にでも感じ取ることが出来ます。書いているときの速度、すなわち、頭に浮かんでから手を動かすまでの時間と、書いている時間。その時間を、文字を見ることが追体験できる。そうすると、その人の頭のなかに入り込むような感覚になるところがあるのです。

最近パソコンやスマホなどで文章を書くこと

井原奈津子

書道講師、手書き文字愛好家。
1973年神奈川県生まれ、多摩美術大学デザイン学科卒業。著書に『美しい日本のくせ字』（パイインターナショナル）、『字はうつくしい』（月刊たぐさんのふしぎ、福音館書店）。

YouTubeチャンネル『井原奈津子の「美しい日本のくせ字」』
<https://www.youtube.com/channel/UCFkcrtfX4AA2hMUKzPU7IQ>

